

「気づく」「感じる」を大切にした音楽科の授業の創造

—第2学年「音の探検隊～海だ 船だ 元宇品～」の実践を通して—

福田 秀 範

1 はじめに

音楽表現の出発点は、身の回りの様々な音や音楽のよさに気づいたり、感じたりすることであると考えます。「何の音かな。」と興味をもって気づくこと。「いい音楽だな。」と（何となくでもいい）感じること。この「気づく」「感じる」部分が根となり、子どもたちの音楽表現を豊かにしていく源となるという仮説の下に導き出した考えである。この根の部分から、豊かに育てていくには、どのような手立てが必要となるのか。本実践では、子どもたちの「気づく」「感じる」姿を学習場面ごとに行った自己評価等を中心にして把握していく。そこで子ども一人一人の思いを教師が受け止め、指導や支援を行っていく。その過程で、子どもの音楽表現がどのように変容していったかを明らかにしていきたい。

2 「気づく」「感じる」姿に焦点に当てた授業の実践

— 第2学年「音の探検隊～海だ 船だ 元宇品～」 —

(1) 題材について

元宇品海岸は2年生が生活科の自然体験で訪れる場所で、海と山が同時に体験でき、生き物や貝殻などが豊富な場所である。港が近いので船の往来が多く、船が通過するたびに激しく波が押し寄せる迫力ある光景は、大音響とともに子どもたちを魅了する。本題材は、この船と波の音を中心に、身近な音素材や楽器、体を使って表現する活動を通して、表現の楽しさを味わうことをねらいとしている。元宇品で自分が見つけた音を自分なりの方法で表現する楽しさを実感できる場にしていきたい。また、学級全体でイメージを共有できる「元宇品」をみんなで音をつくって表現することで楽しさの共有を図りたい。

(2) 指導目標

- 様々な音素材や楽器や体を使って、音をつくって表現する活動を楽しむことができるようにする。
- 元宇品で見つけた音のイメージに合う表現方法を工夫することができるようにする。
- 表したいイメージをふくらませて、自分の音を効果的に表現することができるようにする。
- 友だちの表現を模倣したり、いっしょにやってみたりして、その工夫の楽しさを感じることができるようにする。

(3) 学習の展開と支援・評価の計画

学習内容とめざす子どもの成長の姿を表にまとめると次のようになる。それぞれの学習の場で、子どもの「気づく」「感じる」姿を見とる方法として、主には次の3つを用いた。（表の中にも、このABCを使用している。）

- | | |
|---|--|
| A | 教師による直接観察（授業中の気づきや発言、表現の様子を教師が記録する。） |
| B | VTRやテープによる観察（記録された映像や音で、授業実施後に詳しく見とる。） |
| C | 子どもの自己評価（子ども自ら授業後に残したふりかえりの言葉で見とる。） |

次	学習内容 (全9時間)	めざす子どもの姿	評価の観点			
			関	感受	表	鑑
事前	元字品で音さがしをする意欲を高める。 (1)	元字品で聞こえてくる様々な音をできる限りくわしく聴こうという意欲を高めている。	◎			
第一次 元字品でどんな音が聞こえていたかな	元字品で聞こえた様々な音に気づき表現への意欲を高める。 (1)	元字品で見つけた音を意欲的に発表している。 見つけた音を言葉や音で伝えようと工夫しようとしている。	◎	○	○	○
	<学習活動> ①音を想起する。 ②表現方法をイメージする。 ③次時の計画を立てて終わる。	<支援> ①ビデオや写真→波, 船, 砂浜を提示 ②波=いろいろな箱, 中身, 音の出し方の工夫等でいろいろな波が連想できることに気づくようにする。 船=瓶, 缶, 筒など, いろいろ吹いてみることで音が工夫できることに気づくようにする。 砂浜=容器にいろいろなものを入れて, 振ることで音が工夫できることに気づくようにする。 ③自分が次持ってきた音素材の計画を立てる。(ワークシートに記入)	A A C			
第二次 元字品の音をつくって伝えよう	表したい音の計画を立てて, 音を出してみる。 (2)	表したい音を求めて, 様々な音素材で音を出す方法を考え, 表現している。	○	◎	○	○
	<学習活動> ①持ってきた音素材をみんなに紹介する。 ②表そうとしている音ごとにグループを作り, 音を聴き合う。 ③伝えたい様子のイメージを話し合い, それに合う音づくりをグループごとに行う。	<支援> ①何の音を出そうとして持ってきたか思いを聞き合い, 音への期待を膨らませる場とする。 ②共通の音の友だちどうしでグループになり, 実際の音を聴き合う。よいところやもっとよくなる場所を出し合う場とする。 ③みんなが表したい元字品の様子をイメージする場を設け, グループのみんなの音を生かして, 音で表現する計画を立て練習する。(音の順序, 音の重なり, 音の大きさ, 音の速さ, 音の高さなど)		A B C		
	表現した音を発表し, 互いに聴き合う。 (2)	自分なりの方法で伝えたい音を表現している。 友だちのよさを感じている。	○	○	○	◎
	<学習活動> ①グループごとの表現を聴き合う。 ②感想を出し合って, みんなの音をもっと元字品の様子に近づけたい意欲を高める。	<支援> ①どんな様子を伝えようとしているのか。そのためにどんな工夫をしているか, という2点から他のグループの鑑賞をする。 ②感想を出し合い, 「こうすると」もっという部分に意見を集約するように板書を工夫する。 ※自分たちの演奏を録音して聴きながら, 聞こえてくる音から想像するイメージを自分たちでふりかえり, 表現を深めていく。	A C	B C	B C	A C

	みんなの音を生かした表現を追究する。 (2)	自分の音と友だちの音を生かしながら元字品の様子を表現しようと工夫している。	○	◎	◎	○
	①出し合った工夫を実際の音で試しながら、表現を追究する。	①グループの音はどのような順で演奏するか、どのようにグループをつないでいくかなど、全体を一つにしていく際の観点を伝え、子どもたちが決めていける場にしていく。 ※自分たちの演奏を録音して聴き合いながら、自分たちでふりかえり、表現を深めていく。	A C	A C	B	A
第三次 元字品の 発表会をす る。	元字品の発表を聴き合い、学習をふりかえる。 (1)	全員の発表を聴き合い、音による表現の楽しさを感じている。	◎	○	○	◎
	①元字品の音の表現を録音し、自分たちの表現を振り返る。	①録音した元字品の音を鑑賞し、自分たちの伝えたい様子が自分たちが納得のいくように伝わったところを出し合い、達成感や満足感が共有できるような場にする。	A B C	A	B	B C

(4) 授業の実際

ここでは、自分の音の素材や奏法を追究し、納得のいく音にたどり着いていくまでの子どもたちの変容を中心に、授業の実際について述べていく。

①音に気づく・音を感じる <第一次 元字品でどんな音が聞こえていたかな>

元字品探検の事前に、子どもたちには右のような課題を提示し、音さがしの意欲を高める支援を行った。「元字品でどんな音が聞こえてきたかを発表し合う」というだけでは、「船」「波」という簡単な言葉でしか、ふりかえりができないことを予想した。そこで、「船」でもどんな大きさの、どんな種類の船で、どんなときの音なのか。「波の音」も、どんな大きさの、どこから聴こえた音なのか等、できる限りくわしく元字品の音に気づいたり、感じたりできる活動にしたいと考えた。

そして、子どもたちは自分の見つけた音をワークシートに書き込み、その中で最も音づくりに挑戦したい音を決める活動を行った。

きみはいくつはっ見できるかな？
船が通ったときのなみの音
遠くから聞こえたなみの音
近くで聞いたなみの音
岩に当たるなみの音

【波の音の例】

元字品でこんな音発見

名前 ()
元字品でどんな音を発見できたかな？お気に入りの順番に音を書いてみよう。

番号	どんな音に聞こえた？ (くわしく書いてみよう)	どんなふうに聞こえた？ (ことばで書いてみよう)	何を想像する？ (つかうものを考えよう)
①	貝がらの上を歩く いたゞきの音	カチカチ	かにビーズ をいれて作る
②	なみの音(やわい) (大きい)	サズサズ	はこにビーズ をいれる
③	ははがさかざや いている音(はこ)	ヤヤヤヤ	
④	船のさてき音	ポー	
⑤	海に石を投げ たときの音	ポッちゃん	

本当につくってみたい音はどれかな？
はこにビーズをいれて作る音
がの音

元字品の音をつくってつたえよう①

名前 ()

I 音を出すのにくふうしたことは、どんなことですか。

ビーズをいはいれないと音が
が小さくなってなみの音はなくなるから

II 音をつくってみて、どうでしたか。当てはまるものを○で
かこみましょう。

①音の感じは

どんなふうにちがうと思ったのかな？

②音の大きさは

小さい ○ 大きい ○

③音の高さは

ひくさる ○ 高すぎる ○

④音の質ちは

もう少し
くふうしたい ○ もうかんぱい

もうすこしくふうしたいと思った人は、どんなくふうをしたいかな。

これは、ふりかえりカードの例である。見つけた音を記入する際には、自分のお気に入りの順にすることで、最も音づくりに挑戦したい音を決めやすくした。ここに記入された子どもたちの見つけた音は、次の【活動内容や具体的な「気づく」「感じる」様子】一覧表を参照していただきたい。

②音から気づく・音から感じる <第二次 元字品の音をつくって伝えよう>

第一次で、自分のつくって表現したい音が決まり、それぞれが音さがしの活動に移っていった。まずは、どんな音素材にするか。音に近づけるのに、どんな工夫をするか。この2つの観点にしぼった音づくりを行うことを共通のめあてとして提示した。この2点が具体的にイメージできるように、教師がいくつかやってみせる支援も行った。材料さがしから全てを子どもに任せるには、まだ困難と判断したからである。箱でも、紙、段ボール、金属、プラスチックなどある。中身に何を入れるかで音も全く変わる。箱の中のものをクイズ形式で当てるといこともやってみせた。この例示をすることにより、子どもの音さがしの見通しが高まった。このことは、この第二次で、どの子どもも自分の音を自信たっぷりに表現できたことからうかがえた。次に示すのが、自分のつくって表現したい音が決まってから、音素材を集め、音の出し方を工夫し、互いに発表し合い、聴き合いながら、自分の納得のいくまで音を追究していった子どもの姿をまとめた一覧表である。

児童	第一次 元字品でどんな音が聞こえていたかな	第二次 元字品の音をつくって伝えよう				
	お気に入りの音	選んだ音素材	工夫したこと	グループ表現①	グループ表現②	聴き合いの感想
A	山の風・木の音	ペットボトル	ふきかた	音が小さすぎ	いい感じ	音が伝わってよかった
B	大きな船の汽笛	ペットボトル・水	水の量を少な目にして吹く	いい感じ	いい感じ	水の量をもっと増やそう
C	かにのはさむ音	カスタ・すな	小さな砂でない音が高くなる	いい感じ	カスタに石を挟んでいい感じ	もっと大きい音にしたい
D	大きな船の汽笛	Pボトル	息をいっぱい吹く	いい感じ	いい感じ	音が小さすぎた
E	つりの音	Pボトル・水・石	大きな石をもっと	いい感じ	石を増やし何回も落とした	みんなの音がつながるといい
F	波が岩に当たる音	はこ・大豆と小豆	最後に箱を振る	大きすぎ完璧	いい感じ	波の感じが出る振り方を考えたい
G	船のエンジン音	缶・水・ストロー	ストローでぶくぶく	いい感じ	いい感じ	音が伝わってよかった
H	大きい船通過の波音	はこ	ゆっくり横にした	大きすぎ	いい感じ	迫力のある波が伝わった
I	海草が揺れる音	水	本物の水をたたいた	いい感じ	いい感じ	音が小さすぎて聞こえなかった
J	小さい船の通過の音	Pボトル・水	机の上を擦る	いい感じ	いい感じ	音が伝わってよかった
K	釣り竿を投げた音	缶・水・石	もう少し重いものを使う	キャップをスーパーボールに	バケツに変更	音が小さい。人数を増したい
L	貝殻を歩く音	ビーズ大小・はこ	大きめのビーズをなくす	音がバラバラ	中身を変えてよかった	歩く人にうまく合わせられるといい
M	岩に波が当たる音	はこ・ビーズ	小さい箱・ビーズにした	箱を長くしたい	中身はビーズ	音が短い。もっと箱を長くしたい
N	静かな波の音	乳酸菌容器・ビーズ	石よりもビーズがよかった	みんなと合わない	貝殻と思うといい	波の感じに聞こえてよかった

【活動内容や具体的な「気づく」「感じる」様子】

児童Mは、波の音としてラップの細長い箱に砂を入れて、交互に傾けて音を出す初めの工夫で満足していた。しかし、友だちの長く続く音を聴いて、自分の音が一瞬で終わる音の短さをどうにかしたいと考えた。そこで思いついたのが、友だちの箱と自分の箱をつなげることであった。こうして、自分の納得のいく音を追究していったのである。これは、自分の耳で、短いと気づき、感じた音を友だちの協力を得ながら納得のいく音をめざして解決していった事例である。

児童Nは、波の音を一人の表現では満足していたが、同じ波の音の友だちどうして演奏してみたところ、何か納得のいかないものを感じ始めた。それは容器のちがいがかった。友だちのほとんどが紙箱やペットボトルを使っているのに対し、自分は乳酸菌飲料の小さな容器だった。中身は他の友だちも使っているビーズだが、音は短く、カラカラカラと高い音が響く。この音色がみんなといっしょに音を出すときに、本人はみんなと合わないと感じていたのだった。そこで、この波グループの音を録音したものをグループのみんなで聴

いてみることにした。すると次のような気づきが出た。「Mさんの音は、砂の音というよりも、波で転がっている貝殻みたいに聞こえるよ。」「箱の人が音を出した後に、Mさんの音が聞こえると、もっと本物の波みたい。」このみんなの気づきがMさんに自信を与え、さらに、音を出す順をグループで決め、音を構成していくきっかけになったのである。

3 考察

自分の音の素材や奏法を追究し、納得のいく音にたどり着くまでの子どもたちの変容を中心に述べてきた。「気づく」「感じる」姿を明確にしていくことが、子どもの音楽表現や教師の支援活動にどのような効果を与えたか考察していく。

①音に気づく・音を感じる

元宇品での活動の中心は、生活科で計画している自然体験である。生き物を捕まえたり、貝殻を拾ったり、砂浜で遊んだり、自然を丸ごと楽しむのが大きなねらいである。今回、音楽科が題材として取り上げたのは、この自然を楽しむ中で聞こえてきた音である。もしかしたら、自分の活動に夢中になるあまり、その時回りでどんな音が聞こえていたかなど後になって質問しても、記憶に残っていない、忘れた、という反応が返ってくることも十分に予想できた。自分の活動に夢中になっていたとしても、音に気づく、音を感じるができるようにするのが大切な支援であった。そこで子どもたちには、一つの音をいろいろな角度からとらえられるように、表をつくって課題を示した。その結果、子どもたちはどのように音に気づけばよいか、音を感じればよいかという方法が明確になった。子どもたちの見つけた音は、「〇〇の音」という漠然としたものでなく「〇〇が△△している音」というように、ほとんどの子どもが詳細な音さがしをすることができていた。

②音から気づく・音から感じる

自分や友だちがつくって表現した音からの、「気づく」「感じる」活動はどうだったか。自分のつくって表現した音に満足していた子どもは、友だちの前で発表したり、友だちの音を聴いたりすることをきっかけに、さらなる工夫を始めた。船の汽笛の音を表現するのに、空のペットボトルの先に口を当て、ポーポー吹いていた子どもがいた。同じ奏法、同じ材料だが、中に水を入れて吹いている子どもがいた。自分の音よりもっと船に近い音になっていると感じて、自分もちょうどいい量を工夫しながら、水を入れることにした。船のエンジンの音は、水を入れたペットボトルを船に見立てて、ゆらしたり、振ったりすることから音探しが始まった。思ったような音にならず、机の上に置こうとしたら偶然擦れて、バリバリという音が生じた。普通に置いて擦ってもなかなか音が出ず、少し傾けながら、何度も擦っていくうちに、ついに船のエンジンのような音を発見することができた。クラスみんなにも聴いてもらい、「小さな漁船が通ったときのような音だ。」という気づきや感想を言ってもらい、自信を深めることができたのである。友だちどうしの音を聴き合う場を設定し、その音から気づいたり、感じたりしたことを発表し合うことは、自分の表現を深めたり、よりよいものにしていこうとする意欲を高める支援の場となった。

4 おわりに

子どもたちの「気づく」「感じる」姿を切り口にして、評価の観点ごとに子どもの姿を見ていった。そこで見えてきたのは、音楽の場合、子どもの一瞬の気づきが即表現の変容につながる。その一瞬を教師がどこまで把握できるか。子どもが自分の振り返りに記述したとしても、全てうまく伝えられるわけではない。やはり教師の確かな目、耳が重要になってくる。活動に没頭する子どもたちの中にどっぷり浸かり、子どもの中を動き回り、一人一人の子どもの変容を直に感じられる教師でありたい。